父親シンポジウム抄録

父親だって、悩んでいます

主催 登校拒否・不登校を考える全国ネットワーク

“行かなくていい”と言いつつも…

不登校を認めていいのか

大橋泰之さん

8月26日～27日、東京・早稲田にて「登校拒否・不登校を考える夏の全国合宿２０１７in東京」が開催された。今号では27日に行なわれたプログラム「父親シンポジウム～父親だって、悩んでいます」の抄録を掲載する。掲載するのは、４名の登壇者のうち、大橋泰之さん（49歳）、堀口将さん（38歳）両名のお話。

大橋泰之さん

いま20歳になる息子の父です。息子は、小学校の低学年のころは楽しくすごしているようでした。しかしだんだん学年が上がってくると友だちとの距離が出てきたようです。だいぶあとになってから、ある一人の子からいじめられていた、と息子が教えてくれました。そして息子は小6の夏休み前から学校に行ったり行かなかったりの状態になりました。

私自身は「学校が楽しくてしょうがなかった」という人間でした。ですから、学校に行きたくない、ということ自体がまったく理解できませんでした。学校は、私の通勤する途中にあったものですから、朝起きてこないとか、トイレから出てこないとか、頭が痛いとか言い始めると、「今日はいっしょに行こう」と、努めて明るく言って息子を引っ張って行っていました。私はこうすることが正しいと100％信じ切っていました。息子のために、とてもいいことをしている、と。

妻は私とはちがって、「無理して行かなくていいよ」というような対応でした。私は「なにを能天気なことを」と思っていました。「なるようになるわよ」と達観している彼女を見て、いらだつ気持ちになったこともありました。

息子の苦しさにショックを受けて

あるとき、子どもが家にいないので、「めずらしく学校に行ったのかな」と思ったら、息子がクローゼットのなかに閉じこもって泣いていたんです。これには頭をガーンとなぐられたようなショックを受けました。「そこまで苦しいのか」と。そのときに思ったのは、「自分がやっていたことはすべてまちがっていたんだ」ということです。つらそうな息子を見て、私も本心ではなかったんですが「学校に行かなくていいよ、行きたくなったらいけばいいよ」と、口では言うようになりました。

その後、妻が小学校の先生から「選択肢の1つ」として、「フリースクール東京シューレ」をすすめられたんです。インターネットで東京シューレを調べると、不登校を肯定している、私からすれば怪しい団体でした。しかし妻が11月に行なわれる東京シューレ葛飾中学校の文化祭に行ってみようかと言うので、私としては「まあ、のぞくだけのぞいてみるか」という気持ちで見に行きました。

文化祭に行ってみると、スタッフの方たちは、前のめりでもなく、慇懃でもなく、ふつうに笑顔で子どもにも私にも話をしてくれました。シューレの子どもたちも楽しそうに売店をやったり楽器を弾いたりしていました。息子もなにかを感じ取ったんだと思います。帰り道の途中で「お父さん、僕はここに行く」とはっきり言いました。

しかし私は「よかったな」と素直には思えませんでした。シューレに行くということは息子の不登校を認めることになります。シューレに通ったら息子はもう不登校というカテゴリーから出てこれなくなってしまうんじゃないか、という気持ちもありました。息子の不登校を肯定できない気持ちが、私のなかにまだ根強くあったんです。しかし子どもの希望を否定することもできません。どうすればいいのか、モヤモヤした気持ちですごす日々が続きました。結局、息子はシューレに入りました。そして私はシューレの保護者会に参加することが多くなったのですが、その保護者会をきっかけに、私の考えが変わっていったんです。

私は不登校は病気のようなものだと思っていたのですが、病気ではないということ。それから、特別なことではなく一つの成長の過程である、ということ。そういったことを代表の奥地さんやほかのスタッフの話を聞くなかで知りました。また、ほかの親御さんや卒業した子どもがどのように成長していったかを聞くうちに、私自身が歩んできた道は非常に細い道だったんだな、と思うようになりました。

いまの幸せ感じる力を

私が不登校を認めるようになったころから、息子の表情がやわらいで、笑顔がもどってきました。息子はそのあと、行ったり行かなかったりではありますが、シューレに通っていました。また、うちの子は将棋が大好きで、棋士の羽生善治さんがシューレに来てくださったことがあり、そのとき羽生さんと将棋を指すという経験をさせていただいたんです。それからは目の色が変わって、ずっと将棋をやっています。この先どうなるのかという不安はありますが、いまは「なるようになる」と思っています。

いま、私と同じ、不登校の子どもをもつお父さんに伝えたいことがあります。子どもの不登校に出会うと、最初はおどろいたり、叱ったりするのは、しかたがないことかもしれません。しかし、「子どもが笑顔になるために何をすべきか」ということを最優先に考えていただきたいと思います。

もう一つは、「将来この子はどうなるんだろう」という漠然とした不安におそわれて、今日を笑うことができない、というのはとてももったいないことです。今日笑うことができる、というのは一つの技術、一つの力だと思います。「幸せになるためにどうすればいいのか」と嘆くのではなく、「いまここにある幸せを感じる力」を身につけていっていただけたらいいんじゃないかと、思っています。（了）

いまならわかる

“笑顔”最優先でいい

WEB版『不登校新聞』 連載も初回から読み返し可

連載「不登校きほんのき」(2011年)

◎連載タイトル一覧

「学校との連絡、どこまで?」
「不登校と卒業」
「年末の過ごし方」
「ゲームについて」
「家庭内暴力への接し方」
「リストカットの背景」
「摂食障害」
「昼夜逆転の向き合い方」
「大学の不登校」
「非行や夜遊び」
「不登校と義務教育」など 全23本

ＷＥＢマガジンで上記の記事は、いつでも読むことができます。

WEB版『不登校新聞』

・月2回発行(毎月1日、15日)
・月額820円
・クレジットカード決済のみ
・読者登録後、最大2カ月無料
・2011年までのバックナンバー閲覧可
・「不登校新聞 マガジン」で検索可

◎お問い合わせは東京編集局まで
TEL 03-5963-5526　FAX 03-5963-5527
メール tokyo@futoko.org

futoko.publishers.fm